草刈遺跡を考える

―集落跡関係（1）―

加藤修司

研究連絡誌はセンター職員同士の学問的交流の場として位置づけられている。したがって，速報的，中間発表的な資料についても事情が許す限り積極的に提示し，情報交換を通じてお互いの資質向上に努めるべきである。

草刈遺跡の古墳時代前期土器編年については私案を示し[1]その後弥生時代後期を一部含めた再検証も実施している[2]。ここでは同時期の集落跡関係について二，三の考えやデータをランダムに提示し，今後の本報告への指針と期待としたい。なお，文中で一部の遺跡について引用文献名を省略していることはご容赦いただきたい。

Ⅰ　竪穴住居跡を考える。

1．床面積と形状変化の傾向（草刈A区，B区）

（第1，2図）

㈶君津郡市文化財センターでは，当時の若い職員達が共同研究で該期の竪穴住居跡群の統計的分析を行っている[3]。充実した成果を他にも多く提示してくれた君津郡市の方々には改めて敬意を表したいが，一方で気力，体力とも限界がある一老兵ではこうした作業を行えない。そこで下記に限定して大まかなデータを提示する。なお，以下の文中の「山田橋式」[4]及び草刈遺跡との編年的対比等については注1に言及してある。

（1）床面積

プラニメータや積分計算を使ったものでなく，例えば，多少歪んでいてもほぼ楕円形であれば長軸半径×短軸半径×3.14により求積している。したがって厳密に測定した場合から比べれば5％前後の誤差は生じているであろう。

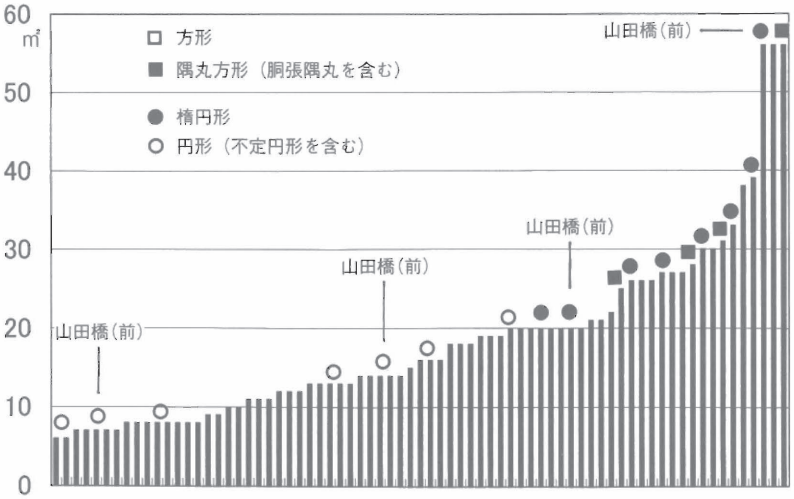
（2）平面形状分類基準

①円形（不定円形を含む）②楕円形 ③隅丸方形（胴張隅丸を含む）④方形

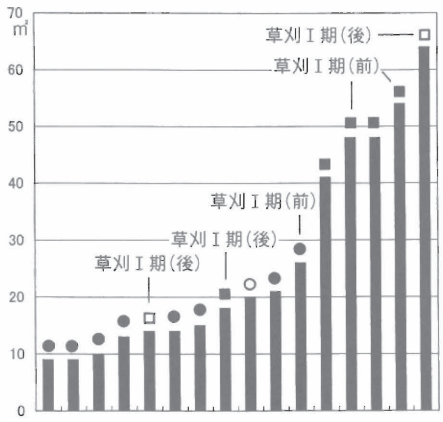
（3）結果

①時期的な推移に伴う規格的，画一的な形状変化は看取されない。弥生後期前半（久ケ原式）においても楕円形大形住居や小形円形住居が共存する。但し隅丸方形は弥生終末期の基調である。

②いわゆる古墳出現期（草刈Ⅰ期後半）に方形が定着



第1図　草刈B区の住居形状と床面積



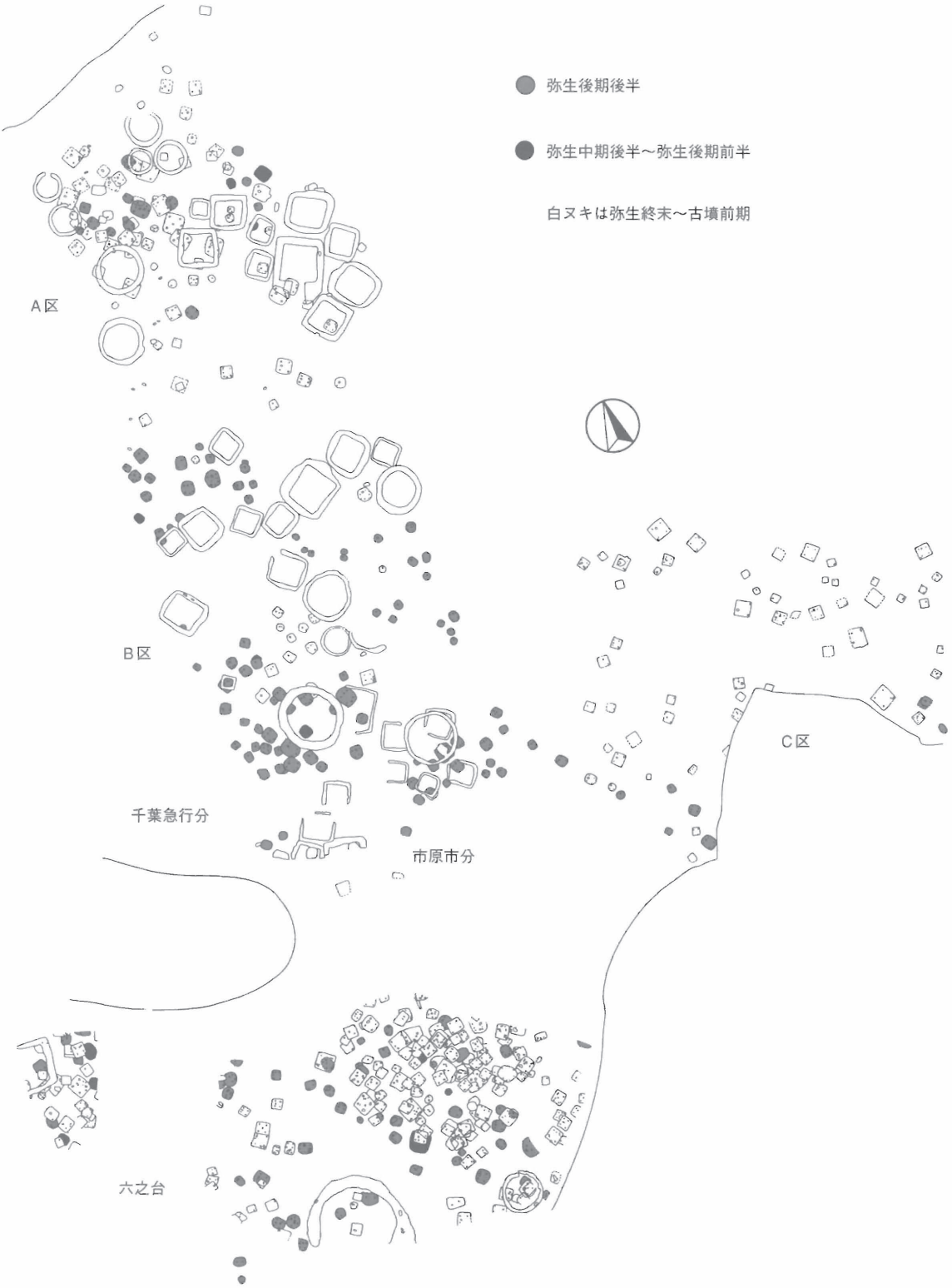
第2図　草刈A区の住居形状と床面積

し，大形住居も出現する。但し，20㎡以下の小形住居も存在する。

③床面積ほぼ20㎡が円形と楕円形，隅丸方形の境目である。

2．築造時期，立地（第３図）

久ケ原式期（後期前半）の住居が立地的に偏在していることは無いが，山田橋式期（後期後半）に比して圧倒的に少数であり，特に南側谷に向かって（B区～C区）分布が薄くなり，C区東側は山田橋式期に限定された集落となる。しかし，谷を超えた南側舌状台地



第３図　草刈遺跡（東部地区）　弥生時代住居跡の分布状況

上の六之台では久ケ原式土器も比較的多く出土しており，特に台地中央には宮ノ台式に比定される大形の住居も１軒だけ検出されている。草刈西部地区の台地上には宮ノ台期の環濠集落が存在しているが，そこからは距離もあり，隔絶感は拭えない。また，六之台南西側谷部からも比較的良好な遺存状態で宮ノ台式土器が出土しており，弥生中期における低地を拠点とした生活，生産空間の一端とも考えられようか。A区西側のK区では中間報告として，久ケ原式に比定される沈線区画の壷形土器片等が比較的多く出土している[5]。すなわち西部地区の環濠集落は解体後に東方面に漸進し，後期後半にはにC区が南東側の縁辺となったようである。なお，B区，C区は報告では「弥生町式」「弥生後期後半」という呼称でいずれも前半期の住居の存在を否定しているが，少量ではあるが該期と考えられる土器は出土している。しかし，いずれも小形の不定及び円形住居のみであり，（B区134号，C区022号）当地区が弥生後期前半期の空白地帯であることには変わりない。なお，六之台では白井久美子氏が住居形態の時期的変遷に言及されている[6]。要約すれば

①当初（宮ノ台式期から久ケ原式期）は大形の楕円形と小形（径３ｍ前後）の円形住居が並行して築かれ

②後期後半になって５～６ｍの規模の楕円，不整円形，多角形が主となり

③後半から弥生終末期にかけて，隅丸方形や長方形，貯蔵穴の定置等が出現する。

④一方で再び不整形の小形住居も出現する。

私見を加えれば②の段階（後期後半）での現象が草刈遺跡（東部）では顕著なようであり，量的にも圧倒している。遺跡全体で共通するかは今後の検討課題であるが，弥生時代中期以降，大規模な集落及びその後の方墳群，円墳群は，中核拠点を移動しながら，低地の利用も含めて継続して営まれていたようである。但し，次項で触れるよう弥生時代後期前半，久ケ原式期に予想される一時的な人口の減少等，断絶部分も看取されており今後に解明すべき課題は多い。

Ⅱ　弥生後期前半期の断絶感と環濠集落を考える

１．宮ノ台式土器の連続と断絶，その背景

東京湾西岸地域から武蔵地方，さらに東岸の房総地方にかけて広域に分布する宮ノ台式土器は，直後の後期前半に比定される土器型式が断絶する地域がある。房総地方でも北総地域や印旛沼以北，以東で特に顕著である。しかし，西上総，特に君津地域では久ケ原式，山田橋式さらに古墳出現期まで連続する場合が多い。この地域格差については以前から指摘されていることであり，拙稿でも佐倉市大崎台遺跡では，環濠集落の解体後の人々の移動がその背景にあるとした。西上総地域は君津地域の大集落跡や芝野遺跡（水田跡）等に見られるよう，水稲耕作の発展を背景とした集落の飛躍的な拡大が想定でき，それが下総方面からの人々の移動を促した考えている[7]。一方，石川日出志氏は，農耕集落を基本としながらも，東谷遺跡やマミヤク遺跡，打越遺跡等の立地の違いから，それぞれが性格の異なる（拠点，臨海，交易）集落内容を示していたと実証的に論じている[8]。いずれにしてもこうした「先進性」とも言うべき状況が各地の人間を（君津地域を中心とした）西上総地域に引きつけたことは確実であろう。

ところで石川氏の論じる宮ノ台式以後の「性格の異

市町村名	遺跡名	時　期	墓域の特徴	墓の種類
袖ケ浦市	境	中期後半 後期後半 後期前半	集落に近接共存 集落に近接共存 集落を廃絶	方形周溝墓群 方形周溝墓群 大形方形周溝墓
袖ケ浦市	滝ノ口向台	中期後半 後期前半	集落に近接共存 消滅，集落は継続	方形周溝墓群 少数の土抗墓へ
木更津市	鹿島塚A （環濠集落）	中期後半 後期前半	集落に近接区分化 隔絶？，集落は継続	方形周溝墓群 方形周溝墓群
佐倉市	六崎貴船台	中期 後期	集落から隔絶の可能性 集落共に消滅	方形周溝墓群
佐倉市	大崎台 （環濠集落）	中期 中期後半 後期～終末期	集落から隔絶，別台地 集落内部に単独出現 集落を廃絶	方形周溝墓群 大形方形周溝墓 大形方形周溝墓（方墳）

なる」後期集落について，「墓制」「墓域」との関連も併せて考えてみたい。中期から後期にかけて，方形周溝墓を基調とした墓制は定着しているものの，それらが集落内部に「共存」する場合，「区分化」される場合，谷を挟んで「隔絶」される場合，「土坑墓」が主体となる場合等様々である。また，周溝の形状も四隅が切れたまま後期に至るもの，大形化して四隅が連結するものも存在する。二，三の具体例をあげると前項表のとおりである。

君津地域は宮ノ台式からスムーズに久ケ原式に連続しており，佐倉市では断絶している。注目すべきは君津地域では中期後半の段階で墓域との接点が近いことであり，「共存」を示す場合も多い。大規模な環濠集落である鹿島塚A遺跡でも大崎台遺跡の「隔絶」とは明らかに性格を異にしている。そしてこうした状況を持つ地域においては引き続き後期前半＝久ケ原式の集落が定着しているのである。

しかしながら継続した久ケ原式期では墓制の上で各集落で様々な違いが現れている。立地，形状，数量も画一的とは言えず「個性」として捉えるべきかもしれない。この要因は何であろうか。本稿では趣旨でないためデータ提示にとどめるが，墓制の形態を決定する第一の要因は集落をとりまく自然環境であろう。例えば地形的に山岳，丘陵地に面した集落，平坦で広大な台地，低地の農耕集落，あるいは海や大河川に面した集落等では当然築造の際の制約が異なっている。第二は集落の社会的，経済的役割に違いがあった場合であろう。第三には集落内部に階層分化や構造変化が現出したり，権力の集中が強調された場合，墓の大形化，孤立化現象を引き起こすことは以前から予想されている。

大崎台遺跡では宮ノ台式後半期を通じ，集落と墓域の隔絶感は極めて強い。しかし，忽然と1基だけ（7号方形周溝墓）集落中心部に出現している。墓の基本的形状は変化しておらず，集落は存在し，宮ノ台式土器も継続してる。環濠築造当初からこれが存在してた可能性も否定はできないが，巨大集団内部に発生した何らかの構造変化＝それは弥生後期以降に指摘されるような「祭祀的な階層分化」「地域的支配者層」等の現象ではなく，集落構成上の矛盾，家族関係の変容等，を背景として考えておきたい。併せてこの時点で環濠集落の解体の萌芽としたい。そして，このような構造変化は，中期後半の段階では君津地域の各集落内部では積極的には見られないと考えている。

2．君津地域の弥生後期環濠集落（第4図）

木更津市鹿島塚A遺跡[9]は，宮ノ台式後半期に一度環濠が築かれ，その後久ケ原式期にかけて外側に再度環濠がつくられるという，集落の継続性が強調された遺跡である。但し墓域は後期の段階で南側台地に隔絶されるらしい。袖ケ浦市美生（びそ）遺跡群でも同様の継続する集落と墓域が検出されている[10]。宮ノ台式後半期においてはじめに住居群がつくられ，これらが廃棄された後に四隅の切れた方形周溝墓群が形成されている。やがて14号住居（宮ノ台式後半）廃棄後に環濠が築かれ，弥生後期前半（久ケ原式）を主体とする集落が定着する。ここでは住居群は環濠内部に，墓（方形周溝墓）は外部にという区別化が明確になる。なお，方形周溝墓は大型化し，四隅の一部が連結したものも出現している。しかし，39号住居址，41号住居

第4図　袖ヶ浦市美生遺跡群環濠集落

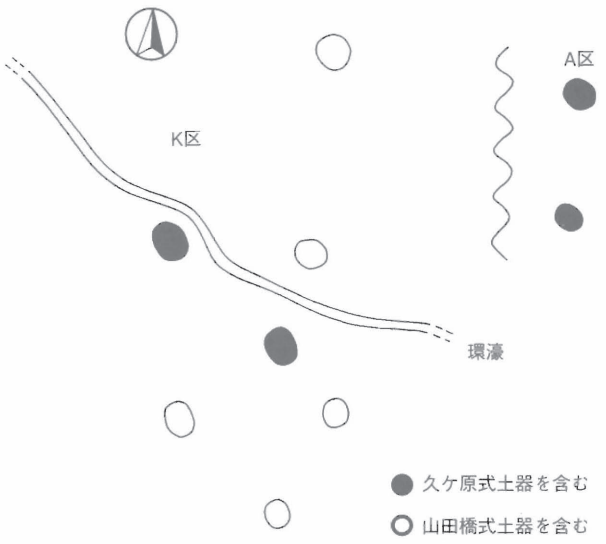
址が作られる弥生後期後半には環濠は完全に埋没している。このように美生遺跡では環濠が存在していた期間は弥生中期後半から後期前半内の短期間に限定されるとともに，後期前半になって集落が拡大し，はじめて環濠がつくられ，墓域の区別化という現象がおきている。

3．草刈遺跡の弥生後期環濠集落（第５図）

草刈遺跡でも弥生後期の「環濠」と思われるＶ字溝がＡ区西側（Ｋ区）で検出されている。現在整理作業中であり詳細は提示できないものの，第５図にあるよう，久ケ原式期と考えられる住居を迂回気味に，溝が南北に斜行している。一方で，山田橋式土器を含む住居が溝の埋没後に築造される状況があり，すなわち「環濠」は「久ケ原式以降で山田橋式以前」の限られた短期間に機能していた可能性が高い。さらに厳密に言えば久ケ原式期の住居はＡ区にも存在しており，「環濠」が継続的に住居を内側に「包括」していたわけでは無いことが推測される。こうなると「環濠」の機能，性格を根本的に見直す必要があるかもしれないし，その名称も正しいのか疑問である。

草刈遺跡では前項の美生遺跡等の君津地域と比べ，久ケ原式期の資料は現状では圧倒的に少ない。今後，宮ノ台式期の環濠集落が指摘されている，草刈遺跡西部地区の整理作業を通じて，異なる解釈が出てくる可能性もあるものの，弥生後期前半の急激な人口減少は明らかである。このような現象は印旛沼周辺の大崎台遺跡をはじめ西上総地域以外では確認される場合が多いが，草刈遺跡でも共通することに注目したい。草刈遺跡と大崎台遺跡は君津地域とは異なり，弥生中期環濠集落が存在する同一台地上に方形周溝墓群が存在していない。草刈遺跡の墓域は不明であるが，おそらく大崎台遺跡同様に別台地に方形周溝墓群が検出される可能性がある。その後，後期前半までには共に集落は解体して行き，「先進性」の強い君津地域に人々は引き寄せられたと考えられる。弥生時代を通じて漠然と「先進性」が強いと言われる西上総地域にあっても，後期前半においては君津地域のみが「より先進性」が強かったと言えようか。

ところで，草刈遺跡では後期前半の断絶は一時的であった。後期後半，山田橋式期になると瞬く間に集落が復活する。草刈遺跡の他，市原台地周辺では再び大幅な人口の流入を見ることになり，各地で巨大集落が発生してくる。こうして君津地域と草刈遺跡は共通性



第５図　草刈Ｋ区弥生後期環濠概念図

が高まり，例えば石器にしても集落拡大に反比例するかのように一気に減少する[11]。この背景には君津地域と同様に「鉄器」の普及[12]を想定すべきであろうか。

以上のような草刈遺跡の歩みは，中期後半の墓域等のあり方で共通性のあった大崎台遺跡とは，決定的な違いとなっている。大崎台遺跡を含む印旛沼周辺地域は，弥生後期以降は方形周溝墓を採用せず，東関東系の影響を受けながら独自の小規模集落を展開させていく。一方，草刈遺跡は後期前半の段階で一時的に君津地域に「依存」したものの，これは「集落の性格の相違」[8]レベルでは無く，生産活動（農耕等）のより良い環境を目指した短期間の移住に過ぎなかった可能性も否定できない。だからこそ同じ台地上に，再び集落が復活するのである。

なお，上記は草刈遺跡西部地区の整理作業が進んだ段階で修正されることもあるため，現状での分析としてご容赦いただきたい。

注

1）加藤修司「土器編年案」『千葉県文化財センター　研究紀要21　房総地方における前期古墳の展開』㈶千葉県文化財センター　2001年

2）加藤修司「草刈遺跡土器編年の検証」『印旛郡市文化財センター　研究紀要４』㈶印旛郡市文化財センター　2005年３月刊行予定

3）共同研究「君津地方における弥生後期～古墳前期の諸様相」『君津郡市文化財センター研究紀要Ⅶ』1996年

4）大村　直「市原市山田橋大山台遺跡」㈶市原市文化財センター　2004年

5）平成15年度，16年度で実測作業を進めている。なお，本稿での「久ケ原式」は縄文帯が沈線区画とＳ字結節文が併用さ

れているが，詳細は稿を改める。

6）白井久美子「千原台ニュータウンⅥ　草刈六之台遺跡」㈶千葉県文化財センター　1994年

7）加藤修司「印旛沼周辺地域における方墳の出現と展開」『印旛郡市文化財センター　研究紀要３』㈶印旛郡市文化財センター　2004年

8）石川日出志「南関東の後期弥生集落」『弥生の「ムラ」から古墳の「クニ」へ』大学合同考古学シンポジウム実行委員会 2002年

9）岡野祐二「千葉県木更津市　請西遺跡群Ⅲ　鹿島塚Ａ遺跡」㈶君津郡市文化財センター　1994年

10）浜崎雅仁「千葉県袖ケ浦市　美生遺跡群Ⅱ　第４・５・６地点」㈶君津郡市文化財センター　1993年

11）弥生時代の石器は六之台以外の東部地区には極めて少ない。このことからも草刈遺跡では弥生後期前半期が一部地域に偏っていることが看取される。但し弥生時代の石器は，土器のように住居跡から出土することが少なく，白井氏によれば六之台では住居跡から出土したものは15％弱に過ぎず，残りはすべて表採か古墳時代以降の遺構中より出土している。今後の整理作業でも十分留意すべき点であろう。

12）安藤広道「相模川流域における宮ノ台式期の集落　その空間的展開の素描」考古論叢「神奈河　第７集」神奈川考古学会　1998年